

国際協力特別賞

自文化理解

学校法人市川学園 市川高等学校 2年 箱守 琴葉

私は二週間前までイギリスに短期留学に行っていた。私にとっては初の海外経験であり異文化を吸収することを期待して出国した。しかし、実際にイギリスで生活を始めると、イギリス文化を体験し理解する、というよりむしろ、イギリスでのちょっとした出来事から、日本や日本人について改めて考えさせられることの方が圧倒的に多かった。

イギリスに到着して、まず一緒に来た同級生たちと話題になったことといえば、イギリス人の容姿端麗なことである。彫りが深く鼻の高い顔立ちに、スラリと伸びた身長はまさにハリウッドスターを連想させた。私も、この人たちが日本に来たら間違いなく美人と評価され続けるだろうと感じた。それに対して、日本人は小柄で顔の彫りも浅い。私はひどく西欧の容姿が羨ましく感じられた。

しかし、なぜ私たちは西洋人の容姿を美しいと思ったのだろうか。私だけなら個人の好みの問題だろうが、同級生たち全員が異口同音に言ったことであるので、私たちは集団としてそのような感覚を持ち合わせているといえる。つまり、私たちは美醜を、西洋を共通の基準として判断しているのだ。

また、数日後私たちは大英博物館を訪れた。休日だったこともあり、展示の目玉であるロゼッタストーンにはかなりの来館者が集まっていた。その後私たちは日本の展示へ移動した。そこで私は、その人の少なさに驚いたのだった。明らかに日本の展示は人気がないように見えた。そして私の友達の一人はその理由を、「日本の文化は華がなくてつまらないからだ」と言った。

私はなんともやりきれない気持ちになった。たしかに友人の言うことが理解できないわけでもない。しかし、シンプルで不完全なものに美を見出すことこそが、日本の美意識なのである。耐えられなかった私は、私自身の茶道部での経験を活かして、日本文化とその精神について英語で説明を始めたのだった。すると、「自分の国にはない、素晴らしい伝統文化ですね。感動しました。」という感想をいただいた。この時私は初めて日本人であることを誇りに思った。同時にその文化の真髄をしっかりと理解していれば、それが西洋かどうかは関係ない、と感じた。

日本文化は誇り高く、世界に誇るべき最高傑作である。それなのに、そのことを心得ている人は、日本人でさえほとんどいない。私も、もし茶道部に所属していなかったら知らずに生きてきただろう。このような状況下なので、日本文化を知らない日本人はそう稀ではないと思われる。

いまやスマートフォンで検索すれば、誰でも気軽に海外の文化を知ることができる時代だ。言い換えれば、今日ではインターネットが、大衆が世界と繋がる媒介になっているのである。そして私たち誰もが世界と簡単に繋がるようになったからこそ、西洋の文化に具体的なイメージを持ち、さらにそのイメージが共有され、集団として共通の西洋を基準とした美意識が形成されたのではないか。同時に、西洋の文化を追い求めすぎた私たちは、自国の文化を理解することを放棄してしまったのではないか。この、共有された美意識の形成と自文化への理解の放棄が、無意識にも日本人の心の中に西洋中心主義を根付かせることとなってしまったと私は考える。

今日、世界中で差別問題が議論されている。また学校でその問題が取り上げられることもある。しかし、本当に差別をなくすためには、個々の心に根付いた西洋中心主義を取り除かなければならない。集団がある一定の理想を持てば、その基準に基づいて優劣を判断することに繋がりがかねないからだ。それを乗り越えるためには、まず自文化を理解することから始めるべきである。自文化に対する誇りを持って初めて、他文化を優劣をつけずに理解することへ近づくことができるのだ。